小学生のGrit（やり抜く力）と学級適応・スクールモラール・ソーシャルスキルとの関連の検討

藤　原　寿　幸・河　村　茂　雄

【問題と目的】

文部科学省（2017）は，生産年齢人口の減少，グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により，社会構造や雇用環境は大きく，また急速に変化しており，予測が困難な時代となっている，とし，新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育むことの重要性を示している。旧来，賃金や所得，昇進や雇用形態などを予測する個人の要因として，いわゆる「認知能力」と称される能力等が注目されてきており（国立教育政策研究所，2017），子どもたちに育んでいく資質・能力として，これまでIQなどの認知的な能力に関心が向けられてきた。

しかし，ここ最近の教育場面における非認知的能力への注目度は高い。OECD（2015）は，人のスキルを認知的スキル（知識，思考，経験を獲得する能力，獲得された知識に基づく解釈や詩論など）と非認知的スキルの2つに分類して捉えており，後者を「社会情緒的スキル（Social and Emotional Skills）」としている。社会的情緒スキルとは「長期的目標の達成」，「他者との協働」，「感情を管理する能力」の3つの側面に関する思考，感情，行動のパターンであり学習を通して発達し，個人の人生ひいては社会経済にも影響を与えるもの（国立教育政策研究所，2017）である。OECD（2015）は，子どもたちの認知的スキルレベル（読み書き能力，学習達成度テスト，成績などで測定可能）を上げることは，高等教育への進学率と労働市場での結果に特に強い影響を及ぼし，社会情動的スキルのレベル（忍耐，自己肯定感，社交性）を上げることは，健康に関する成果と主観的ウェルビーイングの向上，反社会的行動の減少などに特に強い影響を及ぼしていることから，子どもたちにとっては認知的スキルと社会情緒的スキルをバランスよく身につけることが必要だと報告している。加えて，社会的情動的スキルは，特に幼児期から青年期の時期に伸ばしやすく，過去に投資したスキルによってさらに発達するという点から，社会情動的スキルへの初期段階での投資は特に重要であり，高いレベルの社会情動的スキルを備える子どもは，認知的スキルにさらに投資することでより恩恵を受ける可能性が高く，「スキルがスキルを生む」ということも報告している。このことからも，とりわけ社会情緒的スキルを育成することが重要であると考えられる。

国立教育政策研究所（2017）は，この上述のOECDの報告の動向を考慮し，非認知的能力として，社会情緒的コンピテンス（Social and Emotional Competence）に焦点を絞った研究を行っている。社会情緒的コンピテンスとは，「『自分と他者・集団との関係に関する社会的適応』及び『心身の健康・

成長』につながる行動や態度，そしてまた，それらを可能ならしめる心理的特質」を指すものとし，心理的特質とは，認識，意識，理解，信念，知識，能力及び特性などを含むものである（国立教育政策研究所，2017）。本邦の学習指導要領において，この社会情緒的コンピテンスは「生きる力」を育成するための柱の１つである「学びに向かう力・人間性等」や，「生きる力」の構成概念である豊かな人間性（自らを律しつつ，他人とともに協調し，他人を思いやる心や感動する心など）と重なる部分があると考えられ，本邦の教育の方向性は，汎用的な能力の育成を重視する世界の潮流と流れを共にしており，社会情動的コンピテンスの育成が重要であると考えられる。国立教育政策研究所（2017）は「近年，『忍耐力』の意味するところにグリット（Grit）と呼ばれる，より長期的な目標の達成を予測する概念への注目が集まっており，その適応的な側面に注目すべきものがある」とし，ストレスに対処する社会情緒的コンピテンスの１つにGritを挙げている。本研究では数ある社会情緒的コンピテンスの中でも，このGritに注目する。

Duckworth, Peterson, Matthews, & Kelly（2007）は，長期的な目標を達成することができるか，ということに着目し，「長期目標に向けての粘り強さと情熱」がGritであると定義し，それを測定する尺度を開発した。本邦では「成しとげる力」（竹橋・樋口・尾崎・渡辺・豊沢，2019）や「やり抜く力」（ダックワース，2016；山北・安藤・佐藤・秋山・鈴木・山縣，2018）と翻訳されている。Gritは米軍の陸軍士官学校や陸軍特殊部隊の選抜コースの厳しい訓練を耐え抜いたり，英単語スペリングコンテストで優勝したりするなど，様々な領域における達成との関連が示されている（ダックワース，2016）。またGritは，遺伝子と環境の両方に影響を受け，教育的な介入によっても育成することができるとされている（Duckworth, 2016；竹橋ら，2019）。Grit尺度は２つの下位尺度があり，もともとそれぞれ６項目，合わせて12項目から成る。１つは同じ目標に長きにわたり努力を投入する情熱に関するもので「興味の一貫性」因子，もう１つの因子は目標に対して努力し続ける粘り強さに関するもので「努力の粘り強さ」因子と呼ばれ，本邦ではこの尺度が翻訳され，信頼性・妥当性の検討が行われている（竹橋ら，2019）。ただし，さらに適合度を良好にするために，Duckworth & Quinn（2009）は，８項目版のShort Grit（Grit-S）尺度を作成した。本邦でも西上・奥上・雨宮（2015）が，オリジナルのGrit-S尺度の８項目について，日本語訳して作成した日本語版Grit-S尺度が開発された。

清水（2018）は，高校生を対象に，Gritと達成目標，数学の成績の関係を検討し，Gritが達成目標と数学の成績を直接的に促進することなどを報告している。山北ら（2018）は子どものスポーツ活動とGritの関連を報告しておりスポーツ活動を実施している小学校５年生男子の根気得点が高いことを示している。田口（2018）は大学生を対象とした研究で，Grit（やり抜く力），特に粘り強さという性格特性の程度により，英語力と学習時間に違いがあることを明らかにした。奥上・西川（2018）はGritと他のパーソナリティ特性の関連性を検討している。その結果，Gritはエゴ・レジリエンス，Big Five尺度の誠実性などと有意な正の相関があることなどが示された。

以上のように，この尺度を活用した実証的な研究が進められつつあるが，開発されてからまだ間もないこともあり，まだまだ数は少なく，また，大学生を対象とした研究が多く，特に児童期における

ものについてはほとんど見られない。上述したように，日本国内でも，「生きる力」を育成するための柱である「学びに向かう力・人間性等」や，「生きる力」の構成概念である「豊かな人間性」を育んでいくために，国内外で注目されている社会情緒的コンピテンスの１つであるGritと児童期の適応等の関連を検討する研究は意義があることであると考える。

小学生の学校・学級生活に対する適応やスクールモラール，ソーシャルスキルを測定する指標としては，hyper-QU（河村，2008）で測定することができる。hyper-QUは学級生活満足度尺度，学校生活意欲尺度，ソーシャルスキル尺度で構成されている。

学級生活満足度尺度は子どもたちの存在や行動が，級友や教師から承認されているか否かを示す「承認得点」と，不適応感やいじめ・冷やかしなどの侵害行為を受けていないか否かを示す「被侵害得点」の二つの下位因子から構成され，小学生の学級適応感を測定することができる。この２下位尺度の全国平均値を基に，対象者は，学級生活満足群，非承認群，侵害行為認知群，学級生活不満足群の4群に分類される。河村（2006）は各群の特徴を以下のように整理している。学級生活満足群は，「承認得点」が高く，かつ「被侵害得点」は低い群である。不適応感やトラブルが少なく，学級生活・活動に満足し，意欲的に取り組めている子どもたちであり，学級全体に対して指示をすれば，自ら１人で行動できる子どもたちである。非承認群は「承認得点」が低く，かつ「被侵害得点」も低い群である。不適応感やいじめ被害を受けている可能性は低いが，学級内で認められることが少なく，自主的に活動することが少ない，意欲の低い子どもたちであり，学級全体に対して指示を出した後で，教師が机間指導をしながら，さりげなく個別対応をする必要がある。一斉指導の中で，学習や活動に取り組む意欲の喚起を中心とした，個別配慮が必要な子どもたちである。侵害行為認知群は，「承認得点」が高く，かつ「被侵害得点」も高い群である。自主的に活動しているが自己中心的な面があり，他の子どもたちとトラブルを起こしている可能性の高い子どもたちであり，被害者意識の強い子どもたちも含まれる。この群も，一斉指導の中で，子ども同士の対人関係の調整を中心とした個別配慮が必要な子どもたちである。学級生活不満足群は，「承認得点」が低く，かつ「被侵害得点」は高い群である。いじめや悪ふざけを受けていたり，不適応になっていたりしている可能性の高い子どもたちであり，学級の中で自分で自分の居場所を見出せず，不登校になる可能性が高いといえる。この群は個別の特別な対応を必要としている子どもたちである。学級生活不満足群の中でも，要支援群となると，不登校になる可能性，いじめ被害を受けている可能性がとても高く，早急に個別対応が必要となる。

学級生活意欲尺度は，小学生のスクールモラールを測定できる。スクールモラールとは「学級での集団生活ないし級友との関係や学習活動に対する帰属度，満足度，依存度を要因とする児童の個人的，主観的な心理状態」であり，スクールモラールの高い児童は，学校生活を意欲的に送れたり，学業成績が優秀であったりすることが示唆されており，欠席日数も少ないことから，学級集団への適応が良好であることが指摘されている（河村，2000）。

ソーシャルスキル尺度は，友人の気分を害さないように配慮する，既存の関係を維持するという「配慮スキル」と，自分から新たな人間関係を形成したり深めたりするなどの「かかわりスキル」の

2つの下位因子から構成され，学級への適応感との関連も指摘されている。河村（2003）は，ソーシャル・スキルと学級への適応感との間には関係性が認められたとし，学校現場においてソーシャル・スキルを学習することは，学級の適応に関する予防的・開発的援助のひとつの方策になることを示唆している。ソーシャルスキルは学習によって獲得できるとされている（河村，2007；伊佐，2014）

以上から，社会情緒的コンピテンスの1つであるGritと小学生の学級適応，スクールモラール，ソーシャルスキルとの関連を検討する研究は意義があることであると考えるが，そのような研究はみあたらない。したがって，本研究の目的は，社会情緒的コンピテンスであるGritに着目し，小学生のGritが育まれていることが学級適応，スクールモラール，ソーシャルスキルとどのように関連しているかを検討することとする。

【方法】

調査対象：首都圏の公立小学校1校の第4，5，6年生を対象に質問紙調査を行った。回答に不備のなかった233名（男子118名，女子115名）を分析対象とした（Table 1）。

Table 1　各学年の調査対象児童

		男	女	合計
学　年	4	42	35	77
	5	33	39	72
	6	43	41	84
合　計		118	115	233

【調査手続き・倫理的配慮】

調査時期は　20XX年12月であった。校長に調査依頼をして，実施後はすみやかに回収した。調査用紙は本調査が学校の成績に関係がないこと，担任の教員および友達に回答の内容が公開されることがないことを明示した。さらに担任教員には，実施の手順・注意事項のプリントの通りに実施することを依頼し，児童の解答用紙は渡した封筒に入れ，その場で密封してもらい，児童に余計な不安がかからないように配慮した。

【質問紙】

以下の（1）～（2）で構成された。

（1）日本語版 Short Grit（以下 Grit-S）尺度

非認知的特性であるGritを測定できるように，西上・奥上・雨宮（2015）が，オリジナルのGrit-S尺度の8項目について，日本語訳して作成した日本語版Grit-S尺度を用いた。ただし，著者らがオリジナル項目の内容や意味，ニュアンスに留意して小学生が回答しやすいように書き変えた。そこで，

教育学を専門にしている大学教員4名と教育心理学を専門にしている現職（小学校教諭）の大学院生2名の計6名で，文言を書き変えたことにより項目の内容や意味，ニュアンスが変容していないか，文言が児童に理解可能かどうかという点に留意して検討を行った。評定は「1：まったくあてはまらない」から「4：とてもあてはまる」までの4件法で実施した。得点が高いほどGritが高いことを示す。下位尺度には根気（根強い努力）と一貫性（関心の一貫性）があるが，通常は両者の合計がGrit尺度得点として使われ，下位尺度の得点は使われない（西上ら，2015）。本研究でも2因子から成る合成的特性として解釈（Duckworth & Quinn, 2009；竹橋ら，2019）し，扱うこととする。

（2）hyper-QU（河村，2008）

河村（1999）が開発した学級集団アセスメント尺度Q-Uより以下の尺度を用いた。Q-Uは児童の学級や学校場面における満足度や意欲を測定するための，信頼性と妥当性が確保されている標準化された心理尺度である。hyper-QUはQ-Uの学級生活満足度尺度と学校生活意欲尺度の二つの心理テストに「ソーシャルスキル尺度」が加わったものである。

学級生活満足度尺度　児童生徒の学級生活に対する満足感を測定する尺度で，下位尺度は承認（6項目）と被侵害（6項目）である。評定は，「1：全くそう思わない」から「4：とてもそう思う」までの4件法で，単純加算により得点を算出する。さらにそれぞれの全国平均値を交点として「学級生活満足群」「非承認群」「侵害行為認知群」「学級生活不満足群」，そして不満足群の中でもさらに不適応感を示す児童生徒を「要支援群」とし，5つの群に分けることができる。

学校生活意欲尺度　児童生徒のスクールモラールを測定するものであり，各領域における意欲や充足感を測定する尺度である。友達関係（3項目），学習意欲（3項目），学級の雰囲気（3項目）から構成されている。「1：全くそう思わない」から「4：とてもそう思う」までの4件法で，単純加算により得点を算出する。

ソーシャルスキル尺度　ソーシャルスキル尺度は，学級生活で必要とされるスキルについて，配慮のスキル（8項目）とかかわりのスキル（8項目）から構成されている。評定は，「1：全くそう思わない」から「4：とてもそう思う」までの4件法で，単純加算により得点を算出する。

【結果】

1．日本語版Grit-S尺度の因子分析の結果

8項目の因子構造を確認するために，先行研究（西川ら，2015）と同様，最尤法による因子分析を行った。固有値の変化（第1固有値から順に3.38，1.55，.74，.70，.56，.40，.37，.31）から，2因子が適切であると判断し，2因子抽出後にプロマックス回転を行った。2因子までの累積寄与率は49.22％であった。西川ら（2015）と同様の因子構造がみられたので，第1因子を根気，第2因子を一貫性と命名した。各項目は，一方の因子に.40以上の負荷を示し，他の因子に.40以上の負荷を示す項目はなかった。因子パターンと因子間相関をTable 2に示す。α係数はGrit-Sが.78，下位尺度の

根気が .86，一貫性が .65，であった。一貫性ではやや値が小さいが，本研究では Grit-S としての 2 つの因子から成る合成特性として扱っていくので，許容することにした。

Table 2　小学生用日本語版 Grit-S 尺度（最尤法，Promax 回転）

		Ⅰ	Ⅱ	h^2
Grit-S（全体）	$\alpha = .78$			
根気尺度	$\alpha = .86$			
gr1	がんばりやである	**.89**	−.19	.70
gr4	どんなことにもいっしょうけんめいに取り組む。	**.81**	.04	.68
gr3	私は，むずかしいことやつらいことにも負けない。	**.72**	.09	.59
gr2	始めたことはどんなことでも，最後までやる。	**.72**	.06	.56
一貫性尺度	$\alpha = .65$			
gr7	いったん目標を決めてから，後になって別の目的に変えることがよくある。	−.05	**.70**	.47
gr8	物事に対して夢中になっても，しばらくするとすぐにあきてしまう。	.08	**.59**	.40
gr5	新しいアイデアや計画を思いつくと，以前の計画に興味がなくなる。	−.11	**.52**	.24
gr6	終わるまでに何か月もかかる計画にずっと興味をもち続けるのは，むずかしい。	.22	**.43**	.31
	因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	
		—	.40	
			—	

$^{***}p < .001$　$^{**}p < .01$　$^{*}p < .05$

Table 3　各尺度間の相関係数

		1	2	3	4	5	6	7	8
1	Grit-S	—	.24**	.46**	.17**	.35**	-.14*	.46**	.42**
2	友達関係		—	.41**	.57**	.77**	-.50**	.40**	.64**
3	学習意欲			—	.44**	.53**	-.18**	.55**	.62**
4	学級の雰囲気				—	.70**	-.38**	.31**	.50**
5	承認					—	-.51**	.48**	.70**
6	被侵害						—	−.13	−.41**
7	配慮							—	.68**
8	かかわり								—

$^{*}p < .05$，$^{**}p < .01$
$n = 233$

2. 各尺度間の相関

各尺度間の関連を検討するために，Pearson の積率相関係数を求めた。これを Table 3 に示す。まず，Grit-S 尺度と学校生活意欲尺度の友達関係（$r = .24$, $p < .01$），学習意欲（$r = .46$, $p < .01$）との間にはいずれも有意な正の相関がみられた。次に Grit-S 尺度と学級生活満足度尺度の承認（$r = .56$, $p < .01$）

との間には有意な正の相関がみられた。そして，Grit-S 尺度とソーシャルスキル尺度の配慮（$r=.46$, $p<.01$），関わり（$r=.42$, $p<01$）との間には有意な正の相関がみられた。

3. 学級生活満足度の 4 群における分散分析の結果

学級生活満足度尺度の全国平均値をもとに，対象者を 4 群に分けた。その結果，学級生活満足群が 127 名（54.5%），非承認群が 40 名（17.2%），侵害行為認知群が 23 名（9.9%），学級生活不満足群が 43 名（18.4%）となった。

これらの 4 群を独立変数，Grit を従属変数とする一要因分散分析を行った。その結果を Table 4 に示す。Grit において，群の主効果が有意であったため，Tukey 法による多重比較の検定を行った。その結果，Grit においては，学級生活満足群と侵害行為認知群の得点が非承認群と学級生活不満足群よりも，有意に高いことが明らかになった。学級生活満足群と侵害行為認知群の得点の間，また非承認群と学級生活不満足群の得点の間には有意差が出なかった。

Table 4　学級生活満足度尺度 4 群における Grit-S 得点の平均値と標準偏差及び分散分析の結果

	満足群 ($n=127$)	非承認群 ($n=40$)	侵害行為認知群 ($n=23$)	不満足群 ($n=43$)	F 値	多重比較
Grit-S	23.34 (4.27)	20.10 (4.04)	23.91 (4.88)	20.60 (4.37)	9.205***	満，侵 ＞ 非，不

満＝満足群，非＝非承認群，侵＝侵害行為認知群，不＝不満足群
***$p<.001$

【考察】

1. 日本語版 Grit-S 尺度の因子分析の結果

本研究における Grit-S 尺度は 2 因子構造となり，先行研究の Duckworth & Quinn（2009）や西上ら（2015）と同様の結果となった。α 係数は Grit-S が .78，下位尺度の根気が .86，一貫性が .65，となった。西上ら（2015）の報告で，α 係数は Grit-S が .74，下位尺度の根気が .78，一貫性が .73，であり，Grit-S と根気については本研究ではより良好な結果となったが，一貫性ではやや値が小さくなった。一貫性が根気に比べ，小さい値となる傾向は西上ら（2015）以外でも示されている。竹橋ら（2019）は短縮版ではない 12 項目（興味の一貫性因子 6 項目，努力の粘り強さ因子 6 項目）の日本語版グリット尺度の作成および信頼性・妥当性の検討を行っているが，α 係数について，研究 1 ではグリット尺度全体で .82，努力の粘り強さ因子 .82，興味の一貫性因子 .74，研究 2 ではグリット尺度全体 .67，努力の粘り強さ因子 .85，興味の一貫性因子 .83，となっている。また，山北ら（2018）は日本語版子ども用 8 項目の Grit 尺度の検討を行っているが，ここでも α 係数は Grit 尺度で .73，根気尺度 .77，一貫性尺度 .69 となっている。このように，他の先行研究においても 2 因子構造で，一貫性尺度は根気尺度と比べ α 係数は相対的に低くなるという同じ傾向の結果となっており，本研究でも同じ傾向が

示された。

2. 各尺度間の相関

Grit-S 尺度と学級生活満足度尺度の被侵害尺度との間には相関がみられなかったが，「承認得点」との間には有意な正の相関がみられた。この結果からは小学生の Grit の育成の程度と，学級満足感，学級適応感に関わる承認感に関連があることが示された。

Grit-S 尺度と学校生活意欲尺度の「学級の雰囲気」について相関関係は見られなかった。「学級の雰囲気」は，自分の所属する学級についての質問であるが，Grit-S 尺度の質問項目はすべて自分自身について問うものなので，ここには相関関係がみられなかったと考えられる。ただし，学級目標などを大切にし，学級集団として同じ方向で経営されている学級においては相関関係がみられる可能性もあるので検討の必要があるだろう。「学級の雰囲気」の一方で「友達関係」，「学習意欲」との間にはいずれも有意な正の相関がみられた。特に Grit と「学習意欲」については中程度の相関を示している。「学習意欲」は，児童の学習に対する意欲を問うものであり，小学生に Grit が育まれていることと学習に対する意欲には関連があることが示唆された。この結果は，清水（2018）の高校生において Grit が達成目標や動機づけを高める要因を示したという報告と一致している。

Grit-S 尺度とソーシャルスキル尺度については，「配慮」「かかわり」の両因子で中程度の有意な正の相関がみられた。この結果からは，小学生の Grit の育成の程度と「配慮」と「かかわり」の両ソーシャルスキルに関連があることが示された。武蔵・河村・藤村・苅間澤（2012）は，小学生を対象にした研究において，「配慮」と「かかわり」の両スキルが身体的反応，抑うつ・不安感情，不機嫌・怒り感情，無気力や学校忌避感情に影響を及ぼしていることを明らかにし，児童が学級生活を意欲的に過ごしていくためには，「配慮」「かかわり」の両スキルを共によく活用させる重要性を指摘している。また，武蔵・河村（2015）は，小学校における学級集団の状態像と児童の学級生活意欲およびソーシャルスキルとの関連を検討し，最も学級集団の状態がよいとされる「親和的な学級」において，学級生活意欲とソーシャルスキルの状況が良好であったことを指摘している。これらのことから，小学生のソーシャルスキルは，小学生の学級集団において，学級の状態や学級や学校における意欲に関連する重要な要因であり，そのソーシャルスキルの「配慮」「かかわり」の両スキルと Grit の育成について有意な正の相関がみられたことは重要な指摘となると考える。

3. 学級生活満足度の 4 群における分散分析の結果

Grit においては，学級生活満足群と侵害行為認知群の得点が他の 2 群よりも，有意に高いことが明らかになった。学級生活満足群と侵害行為認知群の得点の間，また非承認群と学級生活不満足群の得点の間には有意差が出なかった。つまり，学級生活満足群と侵害行為認知群の共通点は，非承認群と学級生活不満足群よりも承認得点が高いことであり，承認得点が Grit 得点と関連していることが示唆された。一方，被侵害得点と Grit 得点に有意差が出なかったことは興味深い。竹橋ら（2019）は「グ

リットの高い人は，現行目標に意義を見出し，代替目標に目もくれずに，高水準の努力をし続けるが故に，高達成を成し遂げると考えられる」としている。Grit が高い小学生は自分の居場所を見出しつつ，自分が承認してもらえていると感じながら，学校・学級生活に意欲的に取り組める傾向にはあることが考えられるが，決して傷ついていないわけではないということである。Grit は小学生にとって，学校・学級・友達との関係の中で，侵害行為を認知しつつも，それによって目標を見失わずに，学習や友達関係，友だちへの配慮やかかわりなどについて，活動や努力を継続していくことができる社会情緒的コンピテンスである可能性が示唆されたと考える。

【まとめと今後の課題】

本研究では，社会情緒的コンピテンスである Grit に着目し，小学生の Grit が育まれていることが学級適応，スクールモラール，ソーシャルスキルとのどのように関連しているかを検討することが目的であり，Grit と学級適応の「承認感」，スクールモラールの「学習意欲」「友達関係」，ソーシャルスキルの「配慮」「かかわり」と関連があることが明らかとなった。これにより，小学生にとって非認知特性であり，社会情緒的コンピテンスの 1 つであるとされている Grit を育成することは，学級適応やスクールモラールを高めていく上で重要な要素であると考えられる。

また，本研究をまとめていく上でいくつかの課題がみられた。

第一に，小学生を対象とした Grit 尺度の妥当性と信頼性である。本研究では西川ら（2015）の日本語版 Grit-S 尺度を小学生用に文言を書き変えて活用した。教育学を専門にしている大学教員 4 名と教育心理学を専門にしている現職（小学校教諭）の大学院生 2 名の計 6 名で，文言を書き変えたことにより項目の内容や意味，ニュアンスが変容していないか，文言が児童に理解可能かどうかという点に留意して検討を行ったが，妥当性の検討は十分とは言えない。また信頼性についても，本研究で実施した 8 項目の Grit 尺度の Cronbach の α 係数は .78 と，西川ら（2015）の報告（α = .74）とほぼ同様であり，良好であったが，下位尺度である「一貫性」においては α 係数は .65 となり，やや低い値となったことが課題として残った。

第二に，小学生の Grit と学級適応，スクールモラール，ソーシャルスキルに関連があることが明らかになったものの，因果関係が明らかにされていない点である。すなわち，学級適応，スクールモラール，ソーシャルスキルの高まりによって Grit が育成されていくのか，逆に，Grit が育成されることにより小学生の学級適応感等が高まっていくのかは不明である。本研究で小学生の Grit とソーシャルスキルが比較的強い相関があることが明らかになった。ソーシャルスキルは学習によって獲得できるとされている（河村，2007；伊佐，2014）。小学生のソーシャルスキルを高めることにより，Grit を育成することができるということが明らかになれば，Grit を育成する 1 つの方法として提案することも可能であろう。今後の課題としたい。

付記

本研究をまとめるにあたり，統計処理について，早稲田大学教育学研究科博士後期課程教育基礎学専攻の髙橋幾氏に多くのご助言をいただきました。ここに明記して感謝の意を表したいと思います。

引用文献

Duckworth, A. L., Peterson, C., Matthews, M. D., & Kelly, D. R.　2007　Grit: Perseverance and passion for long-term goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 1087–1101

Duckworth, A. L., & Quinn, P. D.　2009　Development and validation of Short Grit Scale（Grit-S）. *Journal of Personality Assessment*, 91, 166–174

アンジェラ・ダックワース（神崎朗子翻訳）　2016　やり抜く力 GRIT（グリット）―人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身につける　ダイヤモンド社

伊佐貢一　2014　学級づくりがうまくいく―全校一斉方式ソーシャルスキル教育―小学校　図書文化社

河村茂雄　1999　QUESTIONNAIRE－UTILITIES（小学校用）　図書文化社

河村茂雄　2000　教師特有のビリーフが児童に与える影響　風間書房

河村茂雄　2003 学級適応とソーシャル・スキルとの関係の検討　カウンセリング研究，36，121–128

河村茂雄　2006　学級づくりのための Q-U 入門 「楽しい学校生活を送るためのアンケート」活用ガイド　図書文化社

河村茂雄・品田笑子・藤村一夫　2007　いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル小学校高学年　図書文化社

河村茂雄　2008　hyper-QU（小学校高学年用）　図書文化社

国立教育政策研究所　2017　非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書

文部科学省　2017　学習指導要領解説　総則

武蔵由佳・河村茂雄　2015　小学校における学級集団の状態像と児童の学級生活意欲およびソーシャルスキルとの関連　学級経営心理学研究，4，29–37

武蔵由佳・河村茂雄・藤村一夫・苅間澤勇人　2012　児童が学級生活で活用しているソーシャルスキルと心理的ストレスとの関連　学級経営心理学研究，1，44–50

西川一二・奥上紫緒里・雨宮俊彦　2015　日本語版 Short Grit（Grit-S）尺度の作成，パーソナリティ研究，24，167–169

OECD　2015　Skills for social progress: The power of social and emotional skills.

庄司一子　1993　児童の self-control の発達的検討　教育相談研究，31，47–58

清水優菜　2018　Grit と達成目標，数学の成績の関係　日本教育工学会論文誌，42，137–140

田口達也　2018　TOEIC，学習時間，そしてやり抜く力―愛知教育大学の事例から―　教養と教育，18，1–9

竹橋洋毅・樋口収・尾崎由佳・渡辺匠・豊沢純子　2019　日本語版グリット尺度の作成および信頼性・妥当性の検討　心理学研究，89（6），580–590

山北満哉・安藤大輔・佐藤美里・秋山有佳・鈴木孝太・山縣然太朗　2018　子どものスポーツ活動と Grit（やり抜く力）の関連：横断研究　日本健康教育学会誌，26（4），353–362